

槐

かい

岡井省二創刊

平成 20 年 5 月号

平成二十年五月一日発行 第十八巻第五号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可
通巻第 二〇三号 (毎月一回、日発行)



春 天

高橋将夫

春はものみなやはらかくほろにがし
本当の鬼もきてゐる鬼やらひ
永き日の女はみんなつれだちて
囀りのなかなか終りさうもなし

握るなら佐保姫の手と孫の手と
陽炎や母より長く妻と住み
雛壇の雄雛出かけてをりにけり
周りの目氣にしてゐたる牡丹の芽
遊んでも遊び足りぬと百千鳥
旋回をして春天の高みまで
山椒の花の密言浄土かな

槐安集

水野恒彦

野火山火この世急がず生きむとす
春愁やまひるの海の音もなく
春の河犢^{たふざ}鼻^き禪をいま濯ぐべく
くつさめを硯の海へ落しけり
穴掘つて穴深くなる春夕べ

延広禎一

梶二〇〇号しかと唧へて龍天に
槐誌かざし省二を囲む花筵
窯変の大皿峯の櫻かな
支へなき古木の櫻神の膝
八塩折の酒を省二と花の山



加藤みき

水の面を大きく回り春風に
春泥や豊葦原の瑞穂の國
春の闇に羽根をひろげし大孔雀
搗きたての蓬餅なり雨になり
向かひ風にふくらむ胸や諸葛菜

石脇みはる

行く雁や合掌したき深空あり
回遊のあはあはとせる春の潮
菜の花を添へて鱸の淡煮かな
鱸酒や大き尾鱸のついて来し
さくと足雪に沈みし涅槃かな

中島陽華

亨保雛海坂の氣を吐いてをり
戸隠に豆がらの山春立てり
追ひ焚きの春の白髪束ねけり
春水や天神さんは核の中
巻物の題箋はらり春霞

竹内悦子

父と子の声おんなじや慈姑掘
うすらひの裏に息吹のありにけり
青饅あるじや主は未だ現れず
涅槃西風片耳に音なかりけり
春満月箎に豆腐と厚揚げ

栗栖恵通子

うつぶせに人形流れ二月尽
蓬餅をゆび指に腹といふがあり
ねぼけ玉くつついてをり日の永し
春雪や小指の紅をぬぐひをり
海底に砂の流れや蝶の昼

大島翠木

春は曙正直すぎ鏡かな
逢ひ見ての昼の過ぎゆく牡丹雪
ぼたぼたと山河にはたと雪女
しずり雪胡桃二つの机かな
蓮根をどう持とうとも万愚節

雨村敏子

うすらひの張る時山の音聞こゆ
大根穴人参の穴春氷
春一番二の矢を継いでをりにける
凍土を起こせば草の根赤きかな
洞門のむかう補陀洛春の雪

小形さとる

きさらぎの古事記の穹に出でにけり
ひとかどの板屋貝かと思ひけり
笹鳴きがうれし快便がうれし
利休忌の沖の雲母きららの赤味かな
ブツ切りの蛸に逢うたる春のくれ

本多俊子

節分のあをき潮を渡りけり
春レモン絞り煩惱ととのへし
奈良坂を三宝柑を持ちて行く
月日貝日髪の中にをりにけり
4 B の鉛筆やはし涅槃西風

天野きく江

ちちの顔ははの顔なり寒牡丹
白梅やいつも冷たき臀部持ち
鳥よ鳥桶より零す薄氷
冴え返る月光にある温度かな
抱卵の木のあり雛まつりかな

槐市集

犬塚 芳子

剪定に光の波動ありにけり
笹鳴きの翔つたと言つて立ち上がる
日向ぼこ無念無想の刻の過ぐ
地虫出づ枝に見下ろす鴉かな
あとさきに風の来てゐる木瓜の花

井上 静子

守らねばならぬ地球や種を蒔く
梅東風や大黒天のあらはるる
福祿寿はイケメンなりし猫柳
臘梅や渡り廊下に軋みある
四ツ身縫ふ鏡の中の雛かな



岩下 芳子

遠近に野の声上り堤焼く
ランナーの一団すぎて風花す
臘梅の色極まりてこぼれけり
露の臺湯の沸きたぎる厨かな
仕舞屋に蛇の目の雪を払ひけり

岩月優美子

島一つ跨ぎてをりし春の虹
春の雪素焼の壺の底にかな
早春の地中也もぞして来たる
土雛や命の重さ等しけれ
寡黙なるけふの波音実朝忌

中道愛子

薄氷や伯耆大山目の前に
本棚に本積み上げて二月かな
あどけなき顔して恋の猫となり
初午の赤い鳥居をくぐりをり
年の豆握つて闇へ撤きにけり

西村純太

恒河沙の佛の数や冬の濤
雪女郎鏡の中を通り過ぎ
忘れぬし心の襞に雪の降る
虎落笛小泉八雲の闇ひとつ
かまど猫昇天せしは誰ならむ

前田美恵子

猿山の猿かたまりし二月かな
春月や黄金の波の盛り上がる
漁船の帰つて来たる春灯
岸近く泡立ちたる春隣
二ヶ月の風を集めてチョコレート

松下八重美

合掌す鶯の声近ぢかと
城壁の窓にもありし涅槃西風
早春や一つ違へし曲り角
引きぬたる根つこの長き春の草
青鰻やいま一面の銀世界

松原伸子

芽吹かむとする木にありし鼓動かな
月おぼろオルガン昔の音鳴らし
妖雲の上にありしは鴉の巢
天日やしるしばかりを耕して
泣顔に「ちちんぷいぷい」豆の花

松本桂子

大寒の三日すぎたる人の声
西方の寺に来てをり梅ぐもり
梅咲いて与一いしぶみ海に向く
盆栽の梅見ごろなり街の寺
馬墓を背に白梅の匂ひけり

柳川 晋

雪搔きを雪投げと言ふ暮しかな
春光の潜んでをりしうぶ毛かな
ハッドウユウドウ つーばおらめい
H O W D O Y O U D O 吃飽了没春日傘
吃飽了没お元氣ですか(ご飯食べたか?)
野遊びや日暮るる前の一ト遊び
台北故旧博物館
楊貴妃は五頭身なり更紗木瓜

吉田 順子

白梅や心無垢なる日となれり
初蝶の吹き上げられし背より
風光る行き交ふ船もさざ波も
松の芯近くまで来て匂ひせり
春泥の轍を軽く歩きをり



槐集

高橋将夫選

渦潮の大海原を呑むごとく

枚方

近藤きくえ

春光の海ひき寄せて風車かな

夫婦雛向き合ふことのなかりけり

料峭や糊付け干す手ももいろに

きさらぎと繰り返しつつ暇ゆく

さきざきは凭れてみたし霜柱

岡崎

加藤富美子

出口なき夢に覺めをり春の雪

残雪やしづかに樹液昇りゆく

いとしめば木も語りくる切山椒

行く水にわれも従ふ七種籠

神木の古りたる枝の芽ぶきかな

枚方

谷村 幸子

地袋に仕舞ふ風鎮おぼろの夜

春きざす丸太を磨く砂の音

火の神や愛宕の山に春の雪

故郷の雪はぬくかり猫柳

冬すみれこころに刻み込みしもの

安城

近藤 公子

二〇〇号祝儀二〇〇号や踏みかためたる霜柱

いにしへの雛の眼に写るもの

結界を越えろと風船放ちけり

白は神の色春は夢の色

節分の鬼たむろなす真昼かな

摂津

中田 禎子

薄水や下弦の月の残りける

春雷やてのひらにある爪の跡

瀬戸の海荒れてをりけり春帽子

春蟬や男どうしのロゼワイン

半身を菜の花にして笑ひをり

岡崎

近藤 喜子

干鰯透けり真実みゆるまで

あたたかや時の素通り許しをり

東帝に微笑み返す赤児かな

惑星も地球も人も浮水

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

夫婦離向き合ふことのなかりけり 近藤きくえ
当り前のこととして気にもとめなかったが、言われてみれば確かにそうだ。顔を見つめ合うなんぞは恋愛時代の話で、なにも今さら顔を見合わせなくてもという世界かもしれないが、何十年も連れ添っていれば、そばに居るだけで通じ合う世界：取り敢えず、そう解釈しておきたい。

行く水にわれも従ふ七種籠 加藤富美子
自然法爾とは、まさにこのこと。

△ いとしめば木も語りくる切山椒 富美子△
△ 出口なき夢に覚めをり春の雪 〃△

故郷の雪はぬくかり猫柳 谷村 幸子
雪は降ってしまうと、寒さがやわらいで感じられる。掲句では猫柳とあるから、そろそろ春も来ているのだろう。

白は神の色 春は夢の色 近藤 公子
神は神聖だから、色は白と言われて素直にわかる。しかし、「春は夢の色」にはまいった。

節分の鬼たむろなす真昼かな 中田 禎子
豆まきのため、鬼の役の人達がたくさん居るのだろう。ひよつとしたら、豆で追い出された本当の鬼がうついついているのかもしれない。それにしても、天狗や鬼や河童はまるで姿を見せない。

くなつてしまった。

惑星も地球も人も浮水 近藤 喜子
宇宙も、星も、地球も、人も、言ってみれば浮水。言ってみれば無常。さらに言えば、空なのである。無常を感じさせずに無常であるところに共鳴した。

寒鯉や芦間の舟の音を消し 久津見風牛
舟がまるで音を消すように芦の間を漕ぎ渡って行く。鯉も水底で動かずにいる寒の静寂がひしひしと伝わってくる。

丹頂の声しなやかにシンメトリー 富松 寛子
鳴き声もしなやかに丹頂が舞う優雅な姿が鮮やかに浮かぶ。シンメトリーは左右の釣合がとれていること。ふと、丹頂の舞とバレエの白鳥の舞が重なったような気がした。

初夢や奈落の底の責め道具 瀬川 公馨
拷問の道具が並ぶ奈落の底。なんとも恐い話である。いや、怪しい話かもしれない。ともかく、初夢でよかった。でも、正夢だとしたら…。

どか雪の空、空寂寂のどの飴 中野 京子
見慣れぬどか雪を無心に見ている。寒さで咽喉の調子でも悪いのか、のど飴をねぶっている。空空寂寂の大層なもの言に対して、のど飴とはまさに俳諧。ちなみに、空空寂寂は「煩惱・執着なく無我・無心であるさま（広辞苑）」。（以下略）